

美術館と連携・協働する高等学校の探究プロジェクトの事例研究

茂木 和佳子*・松本 健義**

(令和2年8月31日受付；令和2年12月28日受理)

要 旨

本研究は、新潟県立国際情報高校のSGH（スーパーグローバルハイスクール）教育プログラムの事例から、同校の地域連携・協働による探究型学習グループが、地域に開かれた美術館構想「八色の森の美術展」を展開する南魚沼市池田記念美術館と連携・協働して実践した高等学校の探究プロジェクトの特質と実践的構造についてアクション・リサーチにより明らかにすることを目的とした。連携は、同校のSGH教育を契機に地域に設立された「一般社団法人 愛 南魚沼みらい塾」を通して、国際情報高校SGH教育プログラムの中心に位置づく「魚沼学」のプロジェクトチームとの連携により行われた。高校生は「八色の森の美術展」のワークショップや美術館での哲学対話に参加し、作品との対話、作家との対話、地域に開かれた美術館の創造に参加することを通して、自己有用感や地域社会への帰属意識を持てるように変容していった。また、美術館関係者と地域関係者らに、「地域に開かれた美術館の可能性」を再確認する機会を与えたことを示した。これらの「地域に開かれた美術館」の働きの関係について、アクターネットワーク理論における「アクター」と「ネットワーク」の相互変容の視点に基づく分析により示した。また、外部コーディネーターの立場から美術館プロジェクトの実現を支援することで、校外の参画的視点から探究的な実践共同体の在り方について、生徒、教師、美術館、学校、みらい塾を含め包括的に示した。

KEY WORDS

SGHプログラム Super Global High School program, 地域連携・協働 Community-based collaboration, 探究型学習 Inquiry learning, アクション・リサーチ Action Research, アクターネットワーク理論 Actor-Network Theory: ANT

1 問題の所在

新潟県立国際情報高等学校は2015年度から5年間、文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」研究指定を受けている。その目的の1つが「課題解決型の学習を通じて、論理的・分析的・創造的思考力を育成する」ことであり、そのための教育プログラムとして「国際情報クリティカル・シンキングプログラム：KJ-CT」が開発された。これはグループワーク、ブレインストーミング、KJ法、ファシリテーション、ロジックツリー、アンケート調査、まとめやプレゼンテーションの方法、データ分析などの論理的・分析的に考えるスキル育成を目指したプログラムである。同校では、1年生前期（4月～9月）週1時間程度の「KJ-CTプログラム」に取り組む。そこで培ったスキルは同校のSGH教育プログラム全体の土台となっている〔図1〕。1年生後期（10月～3月）には、「魚沼学①」という探究型学習プログラムを学校設定科目「スーパーグローバル国際」（文系）「スーパーグローバル情報」（理系）において実施する。「魚沼学」の内容は次のようである。「協働学習と課題解決型学習を組み合わせた探究型の学習である。文理別に、3～4名の男女混合グループで活動する。各グループにチーム名を初回につけている。メンバーは、興味関心のあるSDGsや社会課題、海外研修の訪問先、進学希望学部学科等の共通項で構成する。探究は『課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ』のプロセスをたどる。課題は、生徒自身の日常生活における些細な興味関心や違和感を基点とし、魚沼地域において自身が共感できる課題をテーマとする。資料調査やフィールドワークで情報収集する。整理・分析段階ではSDGsの観点をを用いて魚沼の地域課題と世界の地域課題

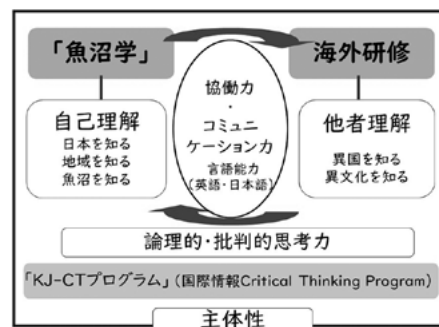


図1 国際情報高校のSGH教育プログラムの構造と育成する資質・能力

を結ぶ。その際、SDGsの視点は、国境を超えた直接的な問いとその解決を連結するインターローカルな関係性に気づく『足場かけ』となる。最終的に、探究の成果をパワーポイントにまとめ、実践可能な課題解決策を地域に提案する⁽¹⁾このように「魚沼学」は同校のSGH教育プログラムの中核となる学習プログラムである。

思考力育成に関して本研究では、米国のマシュー・リップマンが提唱する「子どものための哲学：Philosophy for Children」を参照した。河野（2014）はリップマン『探求の共同体』の「監訳者あとがき」において「こどもたちは相互に対話を重ね、自分の思い込みや先入観を他者の意見によって吟味していく過程の中で、批判的で、創造的で、そして何かをケアして育てていくような思考力⁽²⁾が対話型の哲学教育によって育成できるとする。中でも「思考力と対話する力を育てる」⁽³⁾方法として「こども哲学」という対話の方法がある。こども哲学では「哲学的なテーマについてこどもどうして対話することで、他人と合理的に議論する力、自分自身で自律的に考える力を養う」⁽⁴⁾ことができる。この対話の方法を通し、批判的思考、創造的思考、ケア的思考が養われ、その三つの思考が重なり合うと、多元的思考となる。この三つの思考要素は「独立した三つの思考能力というのではなく、思考することの三つの側面、三つのあり方」⁽⁵⁾であり、「一応独立しながらも重なり合って」⁽⁶⁾いる〔図2〕。

同校のSGH教育プログラムの中核を担う「魚沼学」は地域と連携・協働した探究型の学習プログラムであり、同プログラムを契機として設立された「一般社団法人 愛南魚沼みらい塾」との連携・協働によっておこなわれている。みらい塾との連携・協働した実践事例については茂木・松本（2020）⁽⁸⁾の先行研究があり、「学校とコーディネーター団体または地域とのコミュニケーションや連携・協働については、学校と地域とで異なった立場にある、人、もの、方法をつなぐ、『翻訳者のような存在』」⁽⁹⁾の必要性が指摘されている。だが、そのような存在がどのように学校、みらい塾、地域それぞれの実践的構造を組み替え、課題を解消するネットワークを形成しているか、人・もの・活動の観点から実践的構造を創造しているのかについて明確にはなっていない。

2019年度「魚沼学①」では、みらい塾のコーディネーターにより南魚沼市にある「公益財団法人池田記念美術館」¹⁾と連携し、「地域に開かれた美術館構想」にかかわる探究プロジェクトが発足した。本研究では同プロジェクトに参画した同校1年生9名について、同校のSGH教育プログラムの目標である「創造的思考力の育成」の実践的構造と、学校と校外のネットワーク形成過程について分析、考察する。

2 本研究の目的

本研究では「KJ-CTプログラム」後の探究型学習において、高校生の思考力育成や活用、主体性や創造性の生成過程と事例を述べ、美術館連携プロジェクトの特質と実践構造をアクション・リサーチ²⁾により明らかにすることを目的とする。また、同校の元教員である筆者が、「一般社団法人 愛南魚沼みらい塾」のアドバイザーの立場で2019年度 SGH教育プログラム「魚沼学①」に、「公益財団法人池田記念美術館」の「地域に開かれた美術館構想」と連携した探究プロジェクトを提案し、学校教員ではなく外部コーディネーターの立場から高校生の美術館プロジェクトの実現を支援することで、校外の参画的視点から探究的な実践共同体の在り方について、高校生、教師、学校、美術館、みらい塾を含め、包括的に明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

本研究はアクション・リサーチの立場をとる。ハツ塚（2019）の「第一に、アクションリサーチは、研究の方法である以上に、研究者の姿勢のことを指す。研究協力者との協働的实践を通して、研究の外部に変化をもたらそうとする活動がアクションリサーチである。その活動を通して、研究者の世界だけでなく、実社会に影響と変化をもたらすことに、アクションリサーチの関心はある。第二に、そうした目的を達成するため、アクションリサーチは多様な方法を無政府主義的に活用する。アクションリサーチは質的研究に親和的であるものの、量的な研究方法も、さらに、まったく異質で新しい研究方法も、常に模索し活用する」⁽¹⁰⁾に基づき、筆者は地域の連携機関である「愛南魚沼み

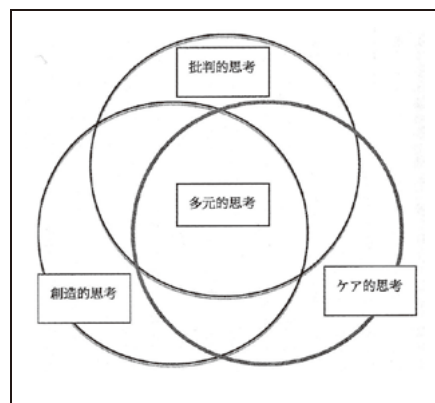


図2 「こども哲学が育成する思考力の三つの側面」, 河野(2014)⁽⁷⁾

い塾」のアドバイザーという立場から、研究対象校と池田記念美術館の連携をコーディネートし、プロジェクトの企画や開発、授業を行う。また同時にアクション・リサーチャーとして参与観察、インタビューをしながら美術館、「魚沼学」チーム（高校生）、学校、地域、みらい塾の関係性や在り方を創造・変革し、協働者とともに反省的にその過程を振り返りながら研究を進める。

本アクション・リサーチでは、高校生や学校との連携・協働の実践形態の生成と過程、高校生や関係者の変容に関する個別の事例について、デジタルカメラ、ビデオ、ICレコーダーで記録を集積し、フィールドノーツを作成する。また、当事者に関して個別または全体へ聞き取りの機会を活動の内外に設ける。

筆者は2018年から2020年にかけて上越教育大学大学院へ内地留学をしていた教員である。研究対象校には2009年から2018年3月まで勤務した。2017年にはSGH課長としてSGH教育プログラムの開発、実践、地域連携に取り組み、みらい塾の設立にもかかわった³⁾。その後、2018年からは大学院の学生ならびにみらい塾のアドバイザーの立場から同校のSGH教育活動に周辺的な参与観察者としてかかわった。2019年は同校と連携・協働しているみらい塾側から、SGH教育プログラムの1つである「魚沼学」で実践するプロジェクトを提案、協働する立場、つまり地域（美術館）と学校をつなぐ立場からかかわった。よって、本研究は校外の参画的視座から取り組んだアクション・リサーチである。

4 地域に開かれた美術館構想

4.1 地域に開かれた美術館構想について

南魚沼市にある公益財団法人池田記念美術館は八色の森公園内に位置し、国際情報高校から徒歩圏内にある美術館である。地域に開かれた美術館構想として2017年から「八色の森の美術展+子ども絵画展」を毎年秋に開催している。開催前の夏には、希望する市内の学校と出品作家によるアートワークショップを開催し、そこでの作品や市内在住もしくは通学する子どもたちから応募があった絵画等を現代アート作家の作品と一緒に館内や館外で展示している。

同展の開催趣旨は「芸術・文化活動は自分自身を探究する旅です。自らが地域や歴史と切り離されたものではなく、創造を通して世界との距離や位置を知ることです。その旅は、互いに尊重し、他者を理解することにつながります。芸術活動は世界各地で繰り広げられている紛争や収奪とは無縁な幸福なコミュニケーションです。われわれは幸福な言語で理解を深め、豊かな魚沼に『幸せの言葉の苗』を育てたいと願います⁽⁴⁾とあり、「八色の森の美術展+子ども絵画展」は地域と地域の子どものたちが芸術を通じてよりより未来へ向かう姿を背景に構想した美術展である。

4.2 連携の経緯

連携のきっかけは2019年5月5日（日）にみらい塾と国際情報高校が共同開催した「地域探究ラボ★ナンギョベース」である。本企画は2019年度新入生である28期生とその保護者を対象に、同校のSGH教育プログラムを知ることが目的として、ワークショップ形式で実施された。南魚沼市長 林茂男氏、大正大学 浦崎太郎教授、南魚沼雪まつり再生プロジェクト実行委員長 高村裕樹氏、副実行委員長 関聡氏、同プロジェクトメンバーの同校27期生がゲストスピーカーとして登壇し、SGH教育プログラムが地域と連携・協働する意義について理解を深めた。池田記念美術館館長 高橋良一氏は地域の一般者として高校生グループに入り、ワークショップに参加した。終了後、同校1学年主任 馬場隆史教諭、みらい塾理事 倉田智浩氏、みらい塾アドバイザーの筆者が高橋に参加のお礼を述べたことがきっかけで会話がすすみ、この時に池田記念美術館の「地域に開かれた新しい美術館構想」が双方に共有された。この構想が両者の目的と重なり、新たな探究学習プログラム開発の可能性を感じたことから、みらい塾を仲介者（コーディネーター）として「魚沼学①」での連携・協働の検討が始まった。

ワークショップ開催から2週間後の5月20日（月）に、「第3回 八色の森の美術展シンポジウム」打ち合わせのために関係者（高橋、立教大学 大嶋彰教授、立教大学 永井玲リサーチアシスタント）が池田記念美術館に参集した際、倉田と筆者も同席した。表1はその「打ち合わせ報告書」（2019年6月3日大嶋作成）である。ミーティングでは各自のこれまでの活動である八色の森の美術展の出品作家ワークショップ、哲学対話、国際情報高校のSGH教育プログラム、みらい塾のコーディネートをつまみ、美術館が高校生の学びの拠点（結節）として連携していく方向性を共有し、みらい塾がコーディネーターとして互恵的な関係を築きながらプロジェクトを実施していくことが決まる。

なお美術館との連携について、会合時点で学校から同意を得ていたが、「美術館のプロジェクトを希望する生徒がいた場合」という条件が付されており、学校は生徒の「やってみよう」という興味や関心なくして連携は成立しない

と考えていた。

表1 「打ち合わせ報告書」(2019年6月3日大嶋彰作成)

<p>「第3回 八色の森の美術展」シンポジウム打ち合わせ —「哲学対話」を入口とした美術館連携—</p> <p>日時：2019年5月20日(月) 13:30~15:30 場所：池田記念美術館</p> <p>趣旨：美術館の敷居が未だに高いことにもみられるように、美術鑑賞においても枠づけられた認識や思考・感性から自由に降りて、作品を見たり楽しんだりすることが一般的に難しいようである。もしかしたら人々の多くは、自由に作品(物事)を見てはいないし、さらにそのことを自覚してさえいないのかもしれない。このようなことにふと気づかされた活動が、第2回展で実施した河野哲也氏の「哲学対話」の試みであった。</p> <p>そこで今回は、これまで行った作家による「出前授業」の継続、発展とともに、作品鑑賞へとつなげる「哲学対話」の試みを上関小学校と国際情報高校の児童生徒へと広げ、美術館と地域とのつながりをさらに掘り起こしてみたい。そして、「哲学対話」を入口として、作家との共同制作も含めた地域の「学びの場」としての美術館の開かれた機能について、試行的な実践を継続したい。</p> <p>現在のメンバー・打ち合わせ出席者：</p> <p>出席 倉田智浩(「愛 南魚沼みらい塾」理事) 出席 茂木和佳子(元国際情報高校教諭、「魚沼学」担当、上越教育大学大学院派遣)</p> <p>出席 高橋良一(池田記念美術館館長) 出席 永井玲衣(哲学対話、立教大学リサーチアシスタント)</p> <p>青木善治(学習臨床研究、上関小学校校長) 松本健義(学習臨床研究、上越教育大学) 丹治嘉彦(出品作家、新潟大学)</p> <p>河野哲也(哲学対話、立教大学) 出席 大嶋 彰(コーディネーター、出品作家、立教大学)</p> <p>協議内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. それぞれの方の「これまでの活動内容と目的」、そして、「この連携で何をしたいのか何ができそうなのか」をお話してください。 2. 連携の具体案作成 3. 実施日程案の作成(シンポジウム予定11月2日) <p>■打ち合わせの概要</p> <p>◆今回の打ち合わせで「哲学対話」を入口とした美術館連携の大まかなイメージが共有できたと思われる。そのイメージの概略は以下のようなものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な現代美術作品に囲まれて「哲学対話」を行うことは、「造形遊び」のように、意味・輪郭・規範などからの無意識的な規制を超えて、より自由に「考える」ことを可能にする。「八色の森の美術展+子ども絵画展」のような場が提供する多様な思考や感性の交差する空間のあり方は、これからの美術館が持たなくてはならない最も重要な社会的機能であるし、地域の「学びの場」の大きな拠点となりうる可能性がある。 ・池田記念美術館から徒歩10分にある県立国際情報高校は、総合的な学習として地域探求「魚沼学」を実施しており、5年前から文科省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け、地域探求を基盤とすることによって世界の地域課題解決へ貢献できる人材育成を行っている。地域の生活や産業を通してその魅力を知ると同時に、地域が抱える大きな矛盾や課題に取り組むためには、柔軟な思考力や協働的なコミュニケーション能力を必要とする。それには「哲学対話」を入口とした美術館との連携が、新たな課題発見の契機を促しつつ、格好の「学びの場」を提供してくれるのではないかと。 ・しかし、高校生と地域をつなぐことは容易ではない。そのため「魚沼学」の担当者、旅行代理店、地域づくりのスペシャリストなどが集まって連携支援団体の設立に動き出し、平成29年秋に、一般社団法人「愛・南魚沼みらい塾」が発足した。この連携支援の主な事業は「高校教育の支援」「地域づくりの推進」「社会教育の推進」であるが、この支援活動によって新たなつながり生まれ、地域の未来を作り出すプラットフォームになり始めている。これに美術館という、より自由に感じたり考えたりする場が加わることのメリットは大きい。地域課題の掘り起こしなどを通じた対話や議論の生成・展開がさらに期待できると考えられる。 ・「哲学対話」はここ数年爆発的に実施されてきた感がある。社会の大きな転換の中で、「そもそも、これって何?」といった物事の前提への問いを自由に口に出すことができるような、話し合いの文化をつくるのが今必要とされているからであろう。美術館だけでなく、図書館やお寺、被災地などの地域創生教育などでも実施されている。哲学対話への導入にも様々な工夫があり、例えば「おじさんを宇宙人にしよう」というテーマで、大人に様々なものを取り付け変身させるワークショップのあと、他者とは? コミュニケーションとは? というような対話が始まったこともある。 ・まずは「八色の森の美術展」で、子どもや大人たちの「そもそも、これって何?」から始まる対話によって、これまでの鑑賞教育を超えて、お互いの視点の多様さを受け止めることから美術館での「学びの場」が始まるのではないかと。
--

4. 3 プロジェクトの提案

2019年7月4日(木) 14:20~15:08, みらい塾は国際情報高校多目的教室にて同校1年生が魚沼学で取り組みそのようなプロジェクトをいくつか提案した〔表2〕。「魚沼学①」ではSDGsの17の目標を基準に興味関心が近い生徒が4~5人のグループに分かれて、自分たちで探究のテーマを設定して取り組む。2019年度の「魚沼学①」はこれまでの

方法を改良し、10月から2020年3月までの期間で、みらい塾が提案したプロジェクトに参加するか、または自分たちで設定したテーマや課題に取り組むか、を選択することができる。みらい塾から提案されたプロジェクトに取り組む場合は、みらい塾から講師やアドバイザーがプロジェクトに伴走し、学校と協働してプログラム開発をしたり、授業に加わり生徒と一緒に活動したりする。

筆者は高橋とメールや電話で連絡を取り合いながらプロジェクトの概要を作成した〔表3〕。高校生に紹介する時点では半年間の具体的な活動を決めず、方向性だけを紹介した。その後、2チーム8名の生徒から美術館との連携プロジェクトへ参加希望があった。2019年7月30日（火）美術館にておこなった打ち合わせでは「造形あそび」「八色の森の美術展出品作家の講演」「哲学対話」の活動をプロジェクトに入れることを決めたが、基本的には生徒の活動や体験から生まれてくるものを拾い、弾力的に活動を構成していくことにした。

なお、みらい塾は2019年度「魚沼学①」において、3つのプロジェクト（①南魚沼雪まつり活性化、②美術館連携、⑤上杉KJプロジェクト⁴⁾、〔表2〕）に伴走することになった。

表2 みらい塾が提案した5つのプロジェクト (2019年7月4日(木))

	プロジェクト	講師, アドバイザー
①	第70回南魚沼雪まつり活性化プロジェクト	JCI 関 聡
②	地域と連携した「新しい美術館を創ろう」	池田記念美術館 館長 高橋良一 みらい塾アドバイザー 茂木和佳子
③	2020年オリパラ地域活性化戦略「ヒューマンツーリズム」プロジェクト	共立観光 倉田智浩 南魚沼市観光協会 鈴木舞花
④	人と地球の健康を考える「食育・雪育」プロジェクト	フリーランス管理栄養士 千喜良たまき 一社 ゆきぐに利雪振興会 高橋悟
⑤	上杉KJプロジェクト ²⁾	一社 愛 南魚沼みらい塾 小林昌子, 倉田智浩 協力：山形県立米沢興譲館高等学校

表3 筆者と高橋の作成資料 (2019年7月4日(木))

2019/7/2 mogi

28期生魚沼学プロジェクト

- 1 テーマ、課題 : 人口減少、少子高齢化
- 2 プロジェクト
「イクビ発! 地域と連携した新しい美術館を創ろう」(仮)
- 3 プロジェクトの背景
今年、「八海山夢展」という地元の芸術家、約100名が出展する美術展の第20回の記念展となります。しかし、芸術家の高齢化が進んでいる一方で、地元の若い作家たちが増えないことから、その美術展の継続に課題を抱えています。また、美術館は一般的に「敷居が高い」と思われがちで、利用者が増えないことも課題の一つです。そこで、「人口減少・少子高齢化」という切口から美術館が抱える課題を高校生と一緒に解決し、全国に先駆けて、「地域と連携した楽しい美術館」の実現を目指したいです。
- 4 プロジェクトの内容
・世界や全国の事例を参考にしたり、地元の芸術家さんたちにインタビューをしたり、一緒に作品を作ったりしながら、池田記念美術館が抱えている課題を解決するためのアイデアを出し合い、企画します。
・高校生が企画した内容を関係者にプレゼンテーションをし、承認が得られた場合は、その企画を実行いたします。
・池田美術館内や公園などで探究活動を行うこともできます。
・10月16日(水) 午後に、「八色の森の美術展」の企画で、「こども哲学」の第一人者である河野哲也さんによる*「哲学対話」の参加を予定しています。
- 5 伴走者、協力者
池田美術館 館長・高橋良一さん
立教大学 教授・大嶋彰さん、教授・河野哲也さん、助手・永井玲衣さん
南魚沼市・県内在住の芸術家、「八色の森の美術展」出品作家・関係者、みらい塾スタッフ

5 連携プロジェクトの実践事例

5.1 授業や活動の全体

本連携プロジェクトのうち全16回を筆者が参加、コーディネートした。その内容を〔表4〕に示す。表中のSGKとは学校設定科目「スーパーグローバル国際」のことである。また、表に色がついている箇所は放課後や休日等、教育課程外でおこなったものであり、全16回中4回がそれに相当する。高校生の参加は希望制とした。

5.2 授業や活動の様子

本連携プロジェクトには、「SDGs 11住み続けられるまちづくり」に興味関心をもつ国際文化科の高校1年生8名(男子2名、女子6名)が参加した。ここでは全16回のプロジェクト活動の中から、「第1回造形遊び」「第4回現代アートと哲学対話」について詳述する。

「第1回造形遊び」は、夏休みの補習期間を利用して2019年8月23日に実施した。高校から徒歩10分にある八色の森公園で池田記念美術館のフィールドワークを兼ねておこなった。この活動には「アートで地域活性」や「地域の野

葉を使って絵具を作る」というテーマで探究する2年生6名も参加しており、合わせて14名で活動した。

表4 『地域と連携した「新しい美術館を創ろう」』で実施した授業や活動

日付	内容	外部講師等
2019年 8月23日(金) 11:00-17:00	第1回フィールドワーク ・自己紹介 ・池田記念美術館内見学 ・八色の森公園での造形遊び ※1,2年生生合同で実施した。	授業者：高橋、大嶋、井口優（地元芸術家）、 松本健義（上越教育大学）、著者
2019年 10月3日(木) 14:25-16:08	第2回 魚沼学 (SGK) ・造形遊びの振り返り ・今後の予定の確認 ・池田記念美術館の概要説明	授業者：高橋、著者
2019年 10月10日(木) 14:25-16:08	第3回 魚沼学 (SGK) ・前回の振り返り ・「八色の森の美術展」出品作家 芝草さんの講話	講師：芝 授業者：高橋、著者 オブザーバー：吉田恭（「八色の森の美術展」 出品作家芸術家）、牧野謙司（南魚沼市立総合 支援学校アートクラブ講師）
2019年 10月15日(火) 16:40-18:30	第4回 現代アートと哲学対話 ・「八色の森の美術展」対話型鑑賞 会にプロジェクトに参加する1年生 と2年生の希望者の合計12名が 参加。	コーディネーター：高橋、大嶋、松本、著者 対話ファシリテーター： 河野哲也（立教大学教授）、阿部ふく子（新潟 大学准教授）、神戸和佳子、花井紗也子
2019年 10月17日(木) 15:20-17:30	第5回「哲学対話」の哲学対話 <創造性と多様性> ・大嶋による「ピカソを超えよう」	授業者：大嶋 オブザーバー：高橋 撮影：松本、著者
2019年 10月24日(木) 14:25-16:08	第6回「池田記念美術館の未来につ いて話そう」 ・イーティングマインドfulness (Eating Mindfulness) ・個人でのアイデア出し	授業者：著者
2019年 10月31日(木) 14:25-16:08	第7回「池田記念美術館の未来につ いて話そう」 ・個人で考えたアイデアをグル ープ内で共有	授業者：著者
2019年 11月2日(土) 14:00-16:30	第8回シンポジウム 「哲学を通して学びの場としての 美術館を考える」 ・生徒1名(A)が参加	パネリスト：河野、青木善治（南魚沼市立上 関小学校）、倉田、松本、著者 コーディネーター：大嶋
2019年 11月3日(日) 14:00-16:00	第9回 文化講座 「美術の未来について話そう」 ・生徒2名(AとB)が参加	講師：前山裕司（新潟市美術館館長）、丹治 嘉彦（作家、新潟大学教授）
2019年 11月7日(木) 14:25-16:08	第10回 魚沼学 (SGK) ・生徒AとBによるシンポジウム と文化講座の報告 ・アイディアマップからキーワ ードを探そう	授業者：著者
2019年 11月14日(木) 14:25-16:08	第11回 魚沼学 (SGK) ・プロジェクト名の決定（「愛され 続ける美術館」） ・各自の企画を構成	授業者：著者
2019年 11月21日(木) 14:25-16:08	第12回 魚沼学 (SGK) ・「愛され続ける美術館」プロジェ クトのアイデアを館長さんの前 で発表しよう	授業者：高橋、著者
2019年 12月12日(木) 14:20-14:50	第13回 魚沼学(SGK) ・中間発表に向けた英語によるプ レゼンテーション準備	授業者：著者
2019年 12月19日(木) 15:20-16:08	第14回 魚沼学(SGK) ・中間発表に向けた英語によるプ レゼンテーション準備	授業者：著者
2019年 12月24日(火) 13:30-15:12	第15回 1年生魚沼学①中間発表会	SGH運営指導委員：石井玲子（新潟県立大 学国際交流センター長）、長沼君主（東海大 学国際教育センター教授）、吉田博（新潟県 文化行政課参与） 管理機関：石橋弘光（教育庁高等学校教育課 指導第1係副参事指導主事） 講師：小林（みらい塾） 授業者：高橋、著者
2020年 2月20日(木)	第16回 ・「叩いて出合う金属の表情」	授業者：大平修也（兵庫教育大学大学院連合 学校教育学研究科博士課程）、著者、高橋 撮影者：上越教育大学大学院生 オブザーバー：今坂優菜（都留文科大学生）

今後半年間のプロジェクトを進めていく上でメンバー同士のコミュニケーションは必須である。そのため身体と心を場に開き、互いの関係性を築いていくための活動として、上越教育大学松本健義（第2著者）が講師となり「造形遊びー八色の森美術館を变身させよう」をおこなった。はじめは慎重に取り組む高校生たちであったが、風を含んだ養生シートが浮かびあがったり、色とりどりのすずらんテープが次第に公園内に広がったりすると、学年や性別に関係なく言葉を交わすようになり、協働し始めていった。養生シートを身にまとい「パリコレみたい」と自分が創造する世界を他の生徒と共有する、丘の上から公園の変化を眺め楽しむなど、高校生が造形遊びに浸った〔図3〕。高校生たちはその後、1本の木の周りに車座になり、冷たいアイステイーを飲みながら活動を振り返った。多くが「高校に入学して以来、自然の中でこんなにゆったりとした時を過ごしたことはなかった」と述べ、「同級生なのに初めて会話をした」「高校生になって初めて遊んだ」「自分が造形遊びで感じたことを大切にしていきたい」「これから関わっていく人たちとの関係を大切にしたい」「人間関係や悩みについて考えない『無の時間』を過ごして、物事の本質は何もないところから自分で見つけるということを学んだ気がする」等の感想が続いた。以上のように美術館連携プロジェクトは、造形遊びを通して高校生が人・モノ・ことの相互作用を身体的に経験することから始まった。

連携プロジェクト第4回は「八色の森の美術展 えっ！からはじめよう」と協働企画した「現代アートと哲学対話」である。教育課程外（放課後）の実施であったため参加の希望を募り、1,2年生12名と同校教諭1名が参加し



図3 造形遊びの様子

た。哲学対話では立教大学 河野哲也を中心として、東京の神戸和佳子と花井紗也子、新潟大学 阿部ふく子の3名がファシリテーターとなり、展示中の現代アートの鑑賞と哲学対話を組み合わせた「対話型鑑賞」をおこなった。冒頭に高校生を前にした河野が哲学対話の簡単な説明をおこない「終わったときに疑問が増えていたらいいね」と述べると、高校生は今まで経験のない、想像もつかないことに向かう不安、一方で未知なるものへの好奇心や期待が入り混じった表情を浮かべつつ、誰一人言葉を発しないまま1枚ずつ座布団を受け取ると、静寂な展示室へ入った。神戸のファシリテーションを受けながら、高校生は気になる作品を好きな場所、好きな姿勢で見た。なかなか見る位置が定まらない人、寝そべったり自由な恰好で見る人、周りの様子をうかがいながら、友だちから離れられずにいる人などそれぞれのやり方で作品と対話をする。30分程度の鑑賞後、2階の展示室で高校生と大人を合わせた約20名が円く座り、阿部のファシリテーションで哲学対話をおこなった。はじめに一人ずつ気になった作品について述べた。そこで多くの人から気になる作品として挙がった高見基秀「対岸で燃える家」(2019)〔図4〕〔図5〕について、以下に示す対話がなされた⁽¹²⁾。

【対話記録】 K：河野， A：ファシリテーター（阿部）， Y， R， S， F， H：高校生

Y：この絵は、よく見ると燃えている家の絵なので、この絵が気になった人に、どうして気になったのか聞いてみたいです。

K：あの絵が気になった人、他にどれだけいたのか、聞いてもらえますか？

A：あの絵が気になった方は手を挙げてみてください。どうして気になったのですか。

R：あの絵はちょっと距離をおいてみたら川を挟んでみているように絵の中に入っているように感じる事ができた。

K：どうしてそういうふうに自分が中に入ることができるような感じがしたと思いますか。

R：部屋に響いている音、絶妙の距離感がすんなり入ることができた気がしました。

K：横回していきましょう（手を挙げた方を順に横につないで発言してもらいましょう）。

S：ストーリー性を感じ、ストーリーから切りとったように感じて、物語があるのかなと気になりました。

K：どういう物語を感じました？

S：小説とかお話から持ってきたように感じました。

K：どんな小説だと思います。

S：ミステリーとか、ミステリー系。

K：どうしてミステリー系だと思ったのですか？

S：火事って感じがしたので、燃えているところから

K：中で何が起きていると思いますか。

S：事件とかで燃えたのかもしれないし、たまたま火がついちゃったのかもしれない。

K：ありがとうございます。

K：燃えてる火とか、燃えてる家とか、もっと全部聞いてみたいですけど。

F：木の影の描き方がリアルなのに幻想的でそこに引き込まれたのと。真っ白い家で自分の家も真っ白な家なので、自分の家が燃えているような感じで引き込まれました。

K：はい、すいません。質問です。なぜ、火事ってそんなに惹きつけられるのですか。なぜ火事の絵でそんなに惹きつけられたのですか。

F：えっとー、火事を実際にみる機会がぜんぜんないので幻想的だと感じます。遠くからぼーっと見ている感じで、幻想的でした。

K：どんな時に幻想的だと感じますか。

F：炎の描き方がすごく綺麗で、ぼーっと見ることができ、すごく幻想的だと感じました。

K：もう一人くらいいました？ はい、お願いします。

Y：私は、あの白い家がけっこう激しく燃えているのに、人が1人も描かれていないというところにすごく引き込まれて、あの家の中には誰かがいるのかなってことや、あの燃えている家の対岸には誰か人がいるのかなって考えて、そういう見えないものについて考えたりして絵を見ていました。

K：どうして、あの画家は人を描かなかったのだと思いますか。

Y：その絵見る人がいろんなことを考えられるようにしたのかなと思います。人が描かれていると大慌てしている様子とか、ただ見ている様子とか、決まったパターンしか思い浮かべられないから、わざと人を描かないでいろんなイメージを持って



図4 高見基秀、「対岸で燃える家」 図5 「対岸で燃える家」を鑑賞する

るようにしたと思います。

K：どういったとき、どういった絵だと、いろんなイメージがもてるのだと思いますか。

Y：想像力が働かせることができる絵っていうのはなんかシンプルな方が、ここに何かがあったほうがおもしろいな、もしかしたらこの中で何かをしているんじゃないかみたいな想像力が働くのだと思います。

K：いままでみた絵の中で、この絵にだけ想像力が働きましたか。一軒家に火がついているこの絵だけ。

Y：あ、ああ。隣の部屋にあった白と黒のあの絵、あんまり色が使われていなくてまわりにもやもやみたいのとか、あと真っ黒のものとか、そういうのもすごくシンプルな絵も、どうしてそういう絵を描いたのかすごく想像力が働くと思いました。

K：白と黒の絵が好きだって言ってくださった方、誰かいましたよね。

H：なんかあの絵は、ぼくはどちらかっていうと白い絵が好きなんですけど、何もなくて何もないからこそ奥まで広がっていて、それがすごくよかったです。

K：想像力がどういうときに掻き立てられるのか気になりました。どんなものに想像力がかき立てられるのか。

H：情報量がすくないものの方が、例えば黒い紙に白い点が一個だけとかそういう絵に想像力が掻き立てられます。

K：想像力って、何か新しいものを想像するのか、それとも既存の何かを思い出すのか。

K：既存の何かを、この人はなんでこういうふうにしたんだろうとかから始めて、「これは何？」というシンプルな問い、そのなかでの想像力ですか。

高校生は対話型鑑賞を通じて、1つの作品を基点として自分の考えを他者と共有し、それが組み合わさって新たな考えが生成されていく「対話」を体験した。教室で教師が出す質問に対して素早くかつ正解を述べることに慣れきってしまった高校生にとって、哲学対話は「思い切り頭を使って疲れる」ものであった。しかし生徒は鑑賞型対話を振り返って、「同じ作品、同じ活動をしていても人によって感じ方や考え方が全く異なる」「年齢や立場の異なる人と対話をする」と新しい考えを聞くことができ、それがまた楽しい経験だ。「問いが問いを生む」「他人の問いが、なぜか跳ね返って自分の問いにもなっていく、そういう不思議さ面白さを感じた」「(発言せずに)自分の疑問を自分のものとして心に留めておき、自分だけのものとする良さもあるのではないかと述べていた。これらの感想から、哲学対話では発言の有無にかかわらず高校生が自分自身の言葉で懸命に考えたことがわかる。生徒と一緒に参加した教諭は「無理やり言わせない。生徒が何か話すまでとことん待つというスタンス。これはなかなか学校ではできないスタンスで良かった。ぜひ同僚の先生方も同じような体験ができるといい。」と述べた。その後、11月2日に池田記念美術館で開催された「八色の森の美術展シンポジウム」ではこの時の哲学対話を取り上げた。河野は「すぐに返答を帰す間は、その人は深く考えることはありません。しかし、今のように少し返答によどみ(……)が出たとき、初めて深く考えるようになります」¹³⁾と述べた。松本は「目の前の絵が自分に見えてくる出会いとその不思議さに立ち止まり言葉を失う経験」¹⁴⁾だとし、「同じ絵でありながら他者に見えている作品への他者自身の語りを聞く(語りに出合う)ことを通して、それまでの自分の見え方や感じ方が、身体のかげに沈められ、沈黙の中から自分の声が必要な語りとして垂直に立ち上がる過程を見ることができた」¹⁵⁾と述べた。生徒は現代アートの対話型鑑賞や哲学対話という、新しい対話、それはこれまでの学校生活で経験したことがない対話、をきっかけに自他の違いを認識し、自分の当たり前や普通とは異なるものの見方を得て、自他の考えを組み合わせる新たな意味を生む価値に気付くことができた。

これを機に、〔図6〕と〔図7〕のようにプロジェクト活動で話し合いをする生徒同士の距離が徐々に縮まっていく。また、高校生Yが哲学対話から着想し、「地域に開かれた美術館構想」の個人活動として取り組んだ「対話ボード」⁹⁾の事例もある。「対話ボード」は美術館がどうしたら活性するのだろうかというケアの思考と、作品を他者との相互作用から楽しみたいと考える創造的思考と、「美術館は入場者数だけで評価されてよいのだろうか？」と自分がとらわれていた思考を問い直す批判的思考の3つをYが組み合わせた結果生まれた多元的思考が形になったものであり、Yの芸術的作品である。



図6 教室での話し合いの様子1



図7 教室での話し合いの様子2

5. 3 コーディネーション

ここでは連携プロジェクトのコーディネーション機能が果たした役割について述べる。茂木・松本(2020)は高等学校の地域・連携協働において解決されるべき課題として「学校とコーディネート団体または地域とのコミュニケーションや連携・協働については、学校と地域とで異なった立場にある、人、もの、方法をつなぐ、『翻訳者のような存在』の立ち位置や働きからその創造と実行を図ることである」⁽¹⁶⁾と指摘している。本連携プロジェクトにおいて筆者はSGH教育プログラム参画者として学校と美術館の連携調整、実践内容の検討等についておこなった。2018年は「地域に開かれた美術館構想」の一環として開催されている「八色の森の美術展+子ども絵画展」に自身が所属するゼミを通して周辺的に参画した〔図8〕。2019年は前述したように学校、美術館、みらい塾が連携する構想が生まれ、〔図9〕で示すように地域に開かれた美術館構想の一部にSGH教育プログラムである「魚沼学①」が含まれる形ができた。筆者はみらい塾のスタッフとして、また八色の森の美術展の周辺の参画者として外部から高校の教育活動をコーディネートした。加えて学校の理解と協力のもと、研究授業者として「魚沼学①」の授業を同校の担当教諭とともに受け持った。以上のことから本連携において筆者は「翻訳者のような存在」として地域との連携・協働する学びを創造し、実行してきた。その結果、美術館、学校、みらい塾に新たな関係性を創造したことで、八色の森の美術展の出品作家と生徒との関係、作品と生徒との関係、生徒と地域との関係、など新たな関係が生まれた。このようにコーディネーターは「人間や人間以外の要素が相互作用しながら社会的現実を構成していくプロセス」⁽¹⁷⁾に内包されている存在である。また「連関の社会学」であるアクターネットワーク理論を援用すれば、コーディネーターとは「差異を生み出すことによって他の事物の状態に変化を与えうる」⁽¹⁸⁾アクターの起点である。そしてアクターの起点から「見覚えのある組み合わせから始め、まったく見知らぬ組み合わせ」⁽¹⁹⁾が生成されていく。コーディネーターはアクターの起点として「まだ残されているあらゆるもの」⁽²⁰⁾、つまりその現場に潜在的に存在するものに目を向け、掘り起こし、動機付け、つなぎ、結節点をつくっていく。場に埋め込まれている潜在的アクターは、文脈や関係性が組み替わることにより立ち現れ、つなぎ目(結節点)を生み出していく。つまり「諸アクターの働きによってネットワークが生み出されると同時に、各アクターの性質や形態はネットワークの働きによって変化し、変化したアクターはさらに新たな関係性を取り結びネットワークを変化させていく」⁽²¹⁾のである。以上のように校外にいる教育活動の支援者(コーディネーター)の働きをアクターとネットワークの相互変容の視点から述べた。

6 考察と課題

高校生は地域に開かれた美術館構想に取り組む池田記念美術館と連携した探究型プロジェクトにおいて、「八色の森の美術展+子ども絵画展」のワークショップや美術館での哲学対話に参加し、作品との対話、作家との対話、地域に開かれた美術館の創造に参加することを通して、主体性や創造性を発揮し、多元的思考を反映させた取り組みを実現していく過程と事例を述べた。また、高校生の変容が美術館関係者と地域関係者らに、「地域に開かれた美術館の可能性」を再確認する機会を与えたことを示した。また、筆者は学校外部のコーディネーター的立場で美術館プロジェクトの実現を支援し、コーディネーターが果たす役割をアクターネットワーク理論における「アクター」と「ネットワーク」の相互変容の視点に基づいて示し、高校生、学校、美術館、みらい塾が創造する探究的な実践共同体の在り方について包括的に示した。

今後の課題は以下の通りである。①現在も継続している美術館と高校の連携プロジェクトの評価と具体について、

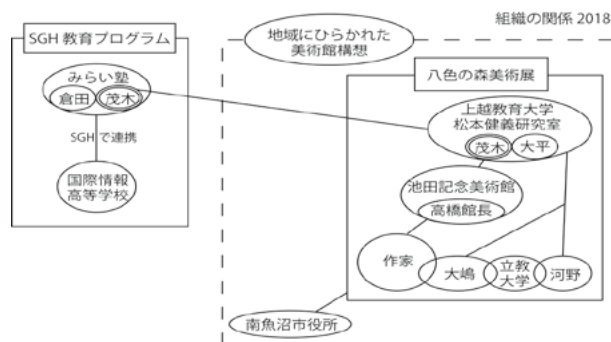


図8 2018年における学校、みらい塾、美術館の連携図

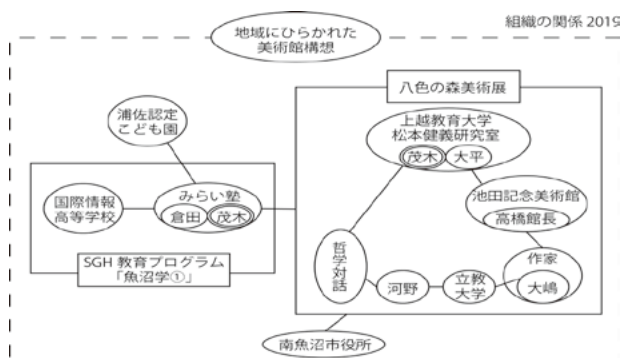


図9 2019年における学校、みらい塾、美術館の連携図

〔図10〕に示す「アクション・リサーチがおこなわれるフィールドの特徴 Characteristics of action research」⁽²²⁾から分析、考察する。②アクターネットワーク理論において研究者は「アクターとしてそこに連なりながら」⁽²³⁾研究する者であるとの指摘に着目し、アクション・リサーチの役割、アクション・リサーチのプロセスやフィールドの特徴についてアクターネットワーク理論に基づいた検討をおこなう。③高校生、学校、美術館、作家、作品、みらい塾等のつながりについて、ラトゥールが「二つの媒介子の共存を引き起こす関係」⁽²⁴⁾とする「翻訳」概念に着目し、その実態を明らかにする。

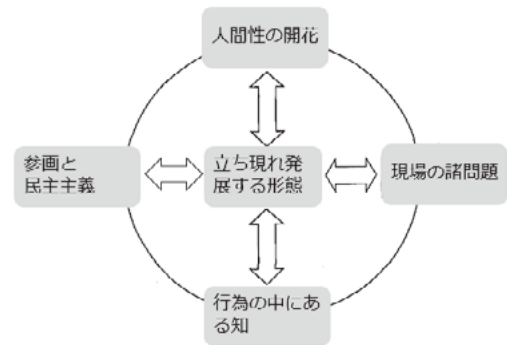


図10 ARがおこなわれるフィールドの特徴

注

- 1) 池田記念美術館は「ベースボール・マガジン社および恒文社の創設者で、野球殿堂入りした池田恒雄のコレクション約3,500点を広く公開し、また極東諸国と郷土のスポーツ・文化交流の発展と推進を図ることを目的とし、平成10年（1998）10月に開館」した。「建物は南魚沼市が建設し、公益財団法人池田記念スポーツ文化財団が運営」している美術館である。池田記念美術館、「美術館の概要」, <http://www.ikedart.jp/outline>（最終閲覧日：2020.9.12）
- 2) 本論文では「アクション・リサーチ」と表記する。なお、引用箇所等は原文表記のまま「アクションリサーチ」または「アクション・リサーチ」と表記している。
- 3) 詳細については以下の論文を参照のこと。茂木和佳子・松本健義(2020), 「SGH教育プログラムにおける地域連携・協働による探究型学習の事例研究」, 『上越教育大学研究紀要』, 第39巻, pp.371-384
- 4) 上杉KJプロジェクトは南魚沼市と友好交流都市である米沢市にある山形県立米沢興譲館高等学校との協働プロジェクトである。双方に歴史的な深いつながりがあることをきっかけとして、相互の探究型学習上での課題（スーパーサイエンスハイスクール校として地域連携を模索する興譲館高等学校とSGH校としてサイエンス的な探究を模索する国際情報高等学校）とノウハウの共有、生徒や地域同士の交流を目的とした連携プロジェクトである。その仲介はみらい塾倉田と著者がおこなった。2019年3月20日に国際情報高等学校生徒9名、職員3名が米沢興譲館高等学校を訪問し、交流を図った。2019年6月29日に同校2年生上杉KJプロジェクトチームは南魚沼市を訪問する首都圏の小学生の歴史ガイドを務めた。さらに、8月は東北芸術工科大学にて、同校を訪問した国際情報高校生と米沢興譲館高等学校の生徒が交流し、「地域活性化」をテーマに協働プロジェクトを立ち上げた。12月の「NIIGATA高校生マイプロジェクト☆LABO in 南魚沼」に米沢興譲館高等学校の生徒や米沢市役所職員が参加した。2020年3月に上杉KJプロジェクトチームは企画した観光バスを南魚沼市から米沢市に走らせる予定であったが新型コロナウイルスのため中止になった。なお、南魚沼市と米沢市の歴史的な関わりは次の通りである。「南魚沼市（旧六日町）は、米沢藩初代藩主の上杉景勝並びに重臣である直江兼統の生誕の地です。景勝は、会津藩主を経て米沢藩主となったが、同行した武士の多くは現在の南魚沼市、つまり上田を生誕の地としていた武将です。しかし、この経緯をみると上田から会津さらに米沢へと移る中で、武士の地縁・血縁者が全て同行したわけではなく、兄弟の一部が上田に残住したといわれており、これは本市と南魚沼市に同じ姓が多いことでも伺えます。昭和59年10月、旧六日町で本市との親善都市締結促進六日町議員連盟が結成され、昭和60年3月には定例町議会において歴史親善友好都市の促進方が決議されました。本市においては、以前から郷土史関係団体を中心として交流が活発になされ、昭和61年3月市議会定例会において、米沢直江会から請願のあった『六日町との歴史親善友好都市締結に関して』については全会一致で採択された。このように、本市と旧六日町との歴史的背景を重要視し、両市町の交流を通じて親善友好を更に深め、両市町の発展を期すため昭和61年6月両市町の定例議会において、歴史親善友好都市提携が可決され、同年9月1日旧六日町において調印が行われました。平成16年11月六日町に隣接する大和町と合併し南魚沼市が誕生。その後平成17年10月には隣接する塩沢町と合併し魚沼地域の中核的役割を果たすべく新生『南魚沼市』となりました。」米沢市、「提携の経緯」, <http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/3253.html>（最終閲覧日：2020.9.28）
- 5) 「対話ボード」とは「八色の森の美術展」で展示されている現代アートの中から、Yが気になった作品の横に、Yが立てた問いを印刷した用紙と鉛筆を置き、見知らぬ相手との「対話型鑑賞」を試みたものである。

引用文献

- (1) 茂木和佳子（2020）, 「地域連携・協働による探究型学習のアクション・リサーチ」, 上越教育大学大学院修士課程学位論文, p.34
- (2) 河野哲也（2014）, 「監訳者あとがき」, マシュー・リップマン, 『探求の共同体 考えるための教室』, 玉川大学出版部, p.432
- (3) 河野哲也（2018）, 『じぶんで考えじぶんで話せるこどもを育てる哲学レッスン』, 河出書房新書, p.8

- (4) 同上
- (5) 同上, p.89
- (6) 同上
- (7) 河野哲也 (2014), 『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』, 河出書房新書, p.83
- (8) 茂木和佳子・松本健義 (2020), 「SGH教育プログラムにおける地域連携・協働による探究型学習の事例研究」, 『上越教育大学研究紀要』, 第39巻第2号, pp.371-384
- (9) 同上, p.382
- (10) ハツ塚一郎 (2019), 「アクションリサーチ(action research)」, サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 編, 『質的研究法マッピング 特徴をつかみ, 活用するために』, 新曜社, p.241
- (11) 八色の森の美術展実行委員会 (2018), 『「八色の森の美術展+子どもの絵画展2017」記録集』, 八色の森の美術展実行委員会, p.2
- (12) 松本健義 (2019), 「八色の森の美術展シンポジウム」, 配布資料
- (13) 八色の森の美術展実行委員会 (2020), 『「八色の森の美術展+子どもの絵画展2019記録集」』, 八色の森の美術展実行委員会, p.108
- (14) 同上
- (15) 同上
- (16) 茂木・松本 (2020), 前掲, p.382
- (17) 伊藤真一 (2015), 「リーダーシップと物質性」, 経営学研究論集 第42号, p.88
- (18) John Law, After ANT: complexity, naming and topology, *In Actor Network Theory and after*, edited by J. Law and J. Hassard, Blackwell, 1999, p.3
- (19) ブリュノ・ラトゥール(2019), 『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』, 法政大学出版局, p.143
- (20) 久保明教(2019), 『ブルーノ・ラトゥールの取説 アクターネットワーク論から存在様態探求へ』, 月曜社, p.63
- (21) 同上, p.64
- (22) Reason & Bradbury, *Handbook of Action Research: Participative Inquiry & Practice*, 2001, pp.1-2.figure1を, 筆者茂木が翻訳して作成
- (23) 久保 (2019), 前掲, p.53
- (24) ブリュノ・ラトゥール (2019), 前掲, p.204

Case study of the high school inquiry project in collaboration with the local art museum

Wakako MOGI* · Takeyoshi MATSUMOTO**

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the nature and practical structure of Niigata Prefectural Kokusai Joho High School students' inquiry project in collaboration with Ikeda Memorial Museum of Art in Minami Uonuma City through Action Research. The project team of "Uonuma Studies", the core of the school's SGH education program, worked in collaboration with the museum through the intermediary of "Ai Minami Uonuma Mirai Juku", which was established in the region as a result of the SGH education program. The high school students participated in the workshop of the "Yairo-no-Mori Art Exhibition" and the philosophical dialogue at the museum. Through the dialogue with the works of art and the artists, and through their participation in the creation of an art museum that is open to the community, the high school students came to have a sense of self-usefulness and a sense of belonging to the local community. The transformation of the high school students provided an opportunity for the museum staff and local community members to reaffirm the potential of the art museum to be open to the community. This study analyzes the function and relationship of these "art museums open to the community" based on the mutual transformation of actors and networks in actor network theory.

* Niigata Prefectural Muikamachi High School ** School Education